

比企谷八幡に親友がい  
たら

アンカー //

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトル通り比企谷八幡に親友がいたらというif。

原作の八幡よりちよつとだけ積極的で、ちよつと真つ直ぐです。

オリキャラは奉仕部にも生徒会にも入りませんし、なんならF組ですらありません。それなりに原作キャラとは関わりますが恋愛フラグはおそらく一切たちません。

# 目次

運命を変える出会いというものは意外と

存在するものである。 1

由比ヶ浜結衣は真っ直ぐな少女である。

27



運命を変える出会いというものは意外と存在するものである。

『わつ、おまえなんでそんなところいんの?』

『…隠れんぼしてたんだよ。もう二時間も隠れてるけど。』

『隠れんぼ…?他に人いなかったぜ?…おまえ置いてかれんたんじゃね?』

『…やつぱり?せつかく友達が出来たと思ったのに。』

『——おまえ、名前は?』

『へ?…比企谷、八幡。』

『なら、ハチな。いいか、ハチ』

『——今日からおれら、友達だ!』

青春とは嘘であり、悪である。

青春を謳歌せし者たちは、常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境の全てを肯定的に捉える。

彼らは青春の二文字の前ならば、どんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば、嘘も秘密も罪咎も失敗さえも青春のスパイスでしかないのだ。

仮に失敗することが青春の証であるならば、友達作りに失敗した人間もまた、青春のど真ん中でなければ、おかしいではないか。

しかし、彼らはそれを認めないだろう。

全ては彼らのご都合主義でしかない。  
結論を言おう。

青春を楽しむ愚か者共、砕け散れ。

「砕け散るのは君の方だよ、比企谷。」

はあ、と溜息を吐きながら眉間に皺を寄せる平塚先生。…はて。

「…なんすか？それ。」

「…君は本当に言ってるのか？これを見たまえ。」

ふむ、これは…高校生活を振り返って。そういえばそんな課題もあつたな。確か俺は…ああ。課題をやったのが確か深夜の三時過ぎくらいで眠くて仕方がなくて内容を覚えていないな。…ん？

「…もしかしてこれ、俺のですか？」

「その通りだよ。…成績優秀の君がこんな文章を書いてきたから私に喧嘩を売ってるのかと思ったよ。」

「…いやあ、その。課題をやった時が丁度深夜テンションだったと言いますか。似たような題材のアニメを徹夜で見せて見終わった時にこの課題を思い出しまして…すみません、書き直してきます。」

今みると酷いな、これ。あの時は眠過ぎてこれでいいやって思ったんだよな。深夜テンションって怖いな。

「…君の目はなんとというか、あれだな。死んだ魚のような目をしているな。」

「そんなDHA豊富そうですかね？賢そうっすね。」



「真面目に聞け…。」

再びため息をひとつ。

「…ふむ。比企谷、君に友達はいるか？」

「…はい？なんすか、その…娘との距離感を掴めないお父さんみたいな質問。」

「いやね、あんな文章を書いたくらいだし君は世界を全てを見下している様な目をしている。…それに、授業中とはともかく授業の前後でも君は誰かと話している様子はなかったからな。悲しい学校生活を送っているんじゃないかと思っただよ。」

おい教師。散々言うな…。

「いますよ、親友が一人。小学校からの腐れ縁ですけど。クラスは基本被ったことないんで、授業前とかは話さないですね。」

「ほう？ここの高校の生徒かね？名前は？」

「失礼しまーす、静ちゃんせんせー、現国の課題クラスの全部集めて持ってきたよつて…あれ、ハチ？どうした？呼び出し？」

「…茅ヶ崎、その呼び方はやめろ。…ハチって、比企谷の事か？知り合いか？」

「…お前、タイミングいいな。先生、コイツですよ。親友。」

「…本当か？なんというか…イメージが真逆だな？」

茅ヶ崎 千景。明るい金髪と少し着崩した制服、顔立ちを整っており、八重歯は快活な印象を助長している。…彼の見た目を要約するとチャライ系イケメンである。イケメン爆ぜろ。まあ見た目によらず真面目で成績優秀だしそもそも彼の髪色は地毛だったりするのだが。

「ん、その通り親友だぜー？な、ハチ。」

「おう。後肩組むの止めろ」

「つれねー!」

調子よく肩組んでくるのを軽くはたく。その姿を見てる平塚先生は心から驚いた様な顔をしていた。

「…本当に仲がいいのだな。比企谷、それなのにこんな文を書いたのか…?」

「…いや、だから深夜テンションだったって言ってるじゃないですか。それに俺の友達  
は千景だけです。で友達作りに失敗してる事には変わりないですし。」

「つつてもハチのぼつちの理由は初日に事故にあつたせいでもあると思うけどな。別に  
コミュニケーション取れないわけじゃないし、顔も目が淀んでる以外じゃ特に問題もな  
いしな。つかハチ何書いたの?」

「お前が言うのと嫌味に感じるけどな。課題だよ、お前らのところもやったら？ 高校生活を振り返ってっつて奴。」

「あー…あつたなそんな奴。見ていい？」

「おう。」

千景の顔が徐々に曇っていく。どんどん悲しいものを見る目になっていつてる気がする。ちやうねん、俺もこんな事書く気なかったねん。寝不足って怖いんだな。

「…ハチ、病んでんの？ 病院紹介しようか？ 親父とは専門違うけどその病院精神科あるし。」

「マジの心配辞めてくれ。」

因みに千景の親は父親が医者で母親が女優だそうだ。幼い頃に離婚していて母親の顔はテレビでしか見たことがないそうだが。彼の髪が金色なのもハーフなため

ある。つくづく主人公みたいなスペックしてんなこいつ。リア充爆ぜろ。

「よし、決めた。」

そんなやり取りをしているとさつきまで沈黙を保っていた平塚先生が口を開いた。

「取り敢えず、それは書き直しだ。」

ですよね。

「それと比企谷、君は部活に入っていないなかったよな。」

「…？ええ、入ってないですが。」

「君にはふざけた課題の罰として奉仕活動をしてもらおう。」

「は、なんすかそれ？自慢じゃないですけど力仕事とかはそこまで出来ないっすよ。」

「すげえ、ホントに自慢じゃねえ」

ケラケラ笑う千景と呆れたように溜息をつく平塚先生の差が激しいな。原因は俺なんだけど。

「大丈夫だよ、力を使うことは殆どないだろうから。比企谷、ついてきたまえ。茅ヶ崎、比企谷と私は行くが君はどうする？」

「は？行くってどこに…」

「おー？どこ行くか知らないけど行つてらっしゃい。あ、ハチ。今日帰り飯食いに行こーぜ。用事終わったら連絡くれよ、待ってるから。」

失礼しましたーと軽く手を振りながら千景は先に部屋を出ていった。少しくらいは俺の返答を聞け。こっちの都合もあるんだから。取り敢えず後で小町に連絡入れるか

「君たちの仲がいいようだなによりだよ。ほら、行くぞ。場所は後でのお楽しみだ。」

それに続く様にして平塚先生も部屋から出ていく。ここで放置されるのも無視して帰るのもどうかと思うので俺は渋々ついて行った。

「茅ヶ崎とは何処で出会ったんだ？腐れ縁とは言うが君たちの性格の差が激しすぎてね。小学の頃は性格が違ったのか？」

歩いていると平塚先生が俺に問いかけてきた。まあ、確かに俺もああいうキャラ  
そんな見た目をした奴は自分から付き合わないだろうしな。

「あー…まあ。出合いは別に大層なものじゃありませんでしたよ。たまたま公園で会って少し話して友達になったって感じですよ。性格も今と大して変わりません。」

「ふむ、君は茅ヶ崎の事は素直に友達と言うんだな。君の性格はもつと捻くれていると思っていたよ。君とも茅ヶ崎ともそれなりに付き合ってきたつもりだったのだがな。」

「まあ、俺も千景も学外のことを態々先生に話したりしませんしね。学校でもアイツと目が合ったら挨拶くらいはしてますけどそもそもあまりエンカウントしませんし。」

千景は教師とも雑談するタイプだが自分の事は語らない癖があったりする。聞けばペラペラ喋るんだけどな。

「後、俺が捻くれているってのは間違ってもないですよ。妹によく言われるんで。ただアイツに関することをぼかすとうるさいんですよ。前にアイツの前でぼつちだつて名乗ったら思いっきり脇腹小突かれました。」

しかも三回。執拗に同じところを狙ってきたあたりマジでキレていたと思われる。



脇腹突かれると変な声出ちやうよね。

「まあ、君のような人間には茅ヶ崎の様に強く引つ張つてくれる人間の方があつていいのかも出来ないな。君も彼の話をしている時は楽しそうだ。」

そんな風に言われると大きなお姉さんたちが喜びそうだな…違いますよ？

「まあ…友達ですから。」

この作品はBL要素はありません。…なんかクラスのメガネの女子が鼻血を吹いた気がするな？

「さて、着いたぞ。」

「…( )は？特別棟つすよね、( )。」

「ふむ。それは中に入ってからだ。邪魔するぞ、雪ノ下。」

「そう言つて平塚先生は扉を開けた。取り敢えず続いて中に入る。というかノックしなくていいのか…?」

教室を見渡した俺は思わず静止した。長い黒髪を風に靡かせ、こちらに一切興味を示さず読書続ける彼女はまるで絵画の様で。

俺は彼女を知っている。雪ノ下雪乃、二年J組国際教養科所属。眉目秀麗、才色兼備なんて言葉が良く似合う女子だ。千景がテストの度に「また2位だったああ」と発狂しているからよく覚えてる。まあ、アイツ国語苦手な足引つ張つてるらしいからね。

「平塚先生、ノックを。」

「ノックをしても君は返事をしないじゃないか。」

「先生が返事をする前に入ってくるからじゃないですか…。それよりも、彼は？」

「ああ、今日からこの部に入部する比企谷だ。比企谷、自己紹介したまえ。」

「は？えっと、二年F組比企谷八幡です…って、入部ってなんすか。聞いてないんですけど。」

いやまあ、なんとなく察してはいましたけど。わざわざこんなところまで連れてこられたし。

「これから君には舐めた作文を書いた罰としてここでの部活動を命じる。異論反論抗議口答えは一切受け付けない。」

俺には肯定する以外の答えはないらしい。いや、別にする気もなかったんだけどなあ…。

「ええ…いや、別に俺はいいですけど、そっちはいいんですか？俺なんか入れて。」

「ああ、雪ノ下。こいつは腐った目とひねくれた神経のせいで孤独で憐れむべき人生を送っていてな、私からの依頼はこの性格の矯正だ。受けてくれるな？」

散々言うなこの人。俺じゃなかったら泣いてるよ？

「お断りします。彼のその下心に満ちた下卑た目を見ていると身の危険を感じるので。」

「安心したまえ。確かに淀んだ目をしているがこの男のリスクリターンと自己保身の計算についてはなかなかのものだ。この男の小悪党ぶりには信用してもいい。」

この人たちは俺の心を折りに来たのだろうか。もしかして俺がサンドバッグに見えてるのだろうか。

「いや、常識的な判断が出来るって言って欲しいんですけど…。」

「小悪党…なるほど。」

しかも聞いてないし納得したぞこいつ。

「まあ、先生の依頼ともなれば無下にはできませんね、承りました。」

「そうか！じゃあ頼んだぞ雪ノ下！」

そう言つて平塚先生は教室を出ていった。え、いや状況が掴めないんだが。

「…あー、その。取り敢えず、座つていいか？」

「ええ、椅子は後ろから勝手に取つていいわ。」

「おお…サンキュ。」

許可を得たので後ろから適当な椅子を見繕い雪ノ下の真正面、机の丁度対になる位置に置いた。

「…質問、いいか？」

「どうぞ。」

「じゃあまず、ここってなんの部活なんだ？平塚先生は何も言わなかったんだが。」

なんとなく二人きりの部屋は居心地が悪かったので質問する事でお茶を濁して  
みることにする。

平塚先生が出ていってから無言で読み出した本をぱたんと閉じてからこちらを  
見た。

「そうね、ゲームをしましょうか。ここは一体何部でしょうか？」

「はあ…。」

ふむ、と教室を見渡してみる。特別な機材はなくあるのは椅子と机だけ。彼女は本を持っていた、と考えると文芸部が妥当。

しかしそう考えると俺がこの部に入れられた意味がわからない。平塚先生は確かに依頼と言っていた。となると……

「……ボランテニア部、とか？」

「……へえ、その心は？」

「特別な機材がないから音楽や料理、手芸みたいな道具がいる部活ではない。平塚先生が依頼と言っていたが、文芸部だとしたら意味がわからない。となるとボランテニア部しか思いつかなかった。どうだ？」

なんとなく自信があつた。名前は違うかもしれないが、そう大きくは外していないだろう。

「……そう、驚いた。意外と頭はキレるのね。そうね、おまけで合格と言ったところかし

ら。

ここは持たざる者に自立を促す部活。ホームレスには炊き出しを、途上国にはODAを、モテない男子には女子との会話を。

ようこそ奉仕部へ。歓迎するわ。」

…モテない男子の件、いる？もしかして俺の事揶揄されてる？それにしても名前は奉仕部らしい。男子高校生的には少し卑猥にも感じる名前だが別にそんな意図は無いし俺も全く気にしてない。嘘じゃないよ。ハチマンウソツカナイ。

「頼まれた以上は力になるわ。あなたの問題を解決してあげる。」

「…あー、じゃあもう一つ質問。俺の問題つてなんだ？別に俺はコミュニケーションをとれない訳じゃないし、自分で言うのもなんだが成績もそれなりに優秀な方だ。目を除いて顔も悪くない。友達がいなくてもいいしな。」

「自分でそんな事を言うのは気持ち悪い人間だと思うのだけれど？…でも、そうね。あなたの問題を言うとしたら、変わる気がない事かしら。あなたのそれはただ逃げてるだ



けだわ。」

「なら変わることも現状からの逃げだろ？なんで過去と今の自分を肯定してやれないんだよ。」

「それじゃあ悩みは解決しないし——、

誰も救われないじゃない！」

彼女は、そう叫んだ後俯いた。何故か、その姿に昔の自分を重ねてしまった。友達がが欲しくてしょうがなくて、自分に理由を見つけようとした自分に。俺と雪ノ下は全く違う人種な筈だ。それでも、よくわからない親近感が湧いてしまった。

「…お前さ、俺に散々なこと言ってたけど友達いるのか？」

「…そうね、まずどこからが友達の定義か教えて貰っていいかしら。」

「…それは友達いないやつの子セリフだろ…。」

ソースは小学校の頃の俺。

「…お前、人から好かれそうな癖にぼっちとか、俺よりも孤独体質じゃねえか。」

「あなたにはわからないでしょうけど、私可愛いから、大抵の近づいてくる男子は私に好意を抱いていたわ。」

ああなるほど。その話の先はなんとなくわかった。俺も覚えがある。いや、正確には千景が、だが。

「…嫉妬か。」

「ええ、下履を隠された60回のうち50は私に嫉妬した女子だったわ。」

…でも、それも仕方の無い事なのかもしれない。人間は完璧ではないから。弱くて醜くて、すぐ嫉妬し蹴落とそうとする。不思議なことにこの世界は優秀な人ほど生きづら

いのよ。そんなの、おかしいじゃない。

——だから、変えるの。この世界を。」

世界を変える、彼女はそう言った。確かにこの世界は優秀な人ほど嫉妬され、蹴落とされてきただろう。

救われなかった時の彼女の表情の理由がわかった。きっと彼女は、変わるこゝとが無意味だと思いたくないのだ。今まで嫉妬され生きてきた彼女にとって、救いだつたのだろう。人を、世界を変えるということは。

「…なあ、雪ノ下。俺と友達になろう。」

「…ええ？」

「いや、なろうじゃないな。俺と唯一の友達曰く友達はなろうって言うてなるものじゃないらしい。だから、今日から俺と雪ノ下は友達だ。」

俺の中で変わることが逃げだって思っていることは何も変わってない。そして、逃げが悪いことも思っていない。

俺は、きつと千景と出会ってなかったら今よりもっと悍ましいものになっただろう。もしかしたら、俺も世界を変えって言っている側だったのかもしれない。それを救いにしなければ立っていられなかったかもしれない。

それでも俺は、運命が変わる出会いというものを知っている。たった一人の人間の言葉で、簡単に人を救えるのも知っている。

「なあ、知ってるか？人間って意外と単純なんだぜ？たった一人の言葉で救われる事も、まるで世界が変わったかの様な衝撃を受けることだってあるんだ。」

彼女のぼかんとした顔を見て俺は思わずニヤける。

「これから同じ奉仕部としてよろしくな？雪ノ下。」

「…で、一方的に雪ノ下さんの友達になつてきたと。なんというか…お前、やつぱ面白いと思うわ。」

場所は変わつて学生の味方サ○ゼ。正面にはスプーンとフォークを器用に使つてパスタを食べてる千景がいる。

「…なんか、思い返すと恥ずかしくなってきた。」

いや、ほんとにあの時はなんか行けるつて思つちやつたんだよなあ…ここが外じゃなかつたらのたうち回つていただろう。俺のばーか!!

「んー…ま、確かに恥ずかしいのは否定しないけど。でも、よかつたと思うぜ? 静ちゃんせんせーも褒めてたからな。私好みの展開だとか言つて。」

「は…？いや、平塚先生がなんで内容を知ってんだよ？」

「静ちゃんせんせー、話最後まで聞いてたらしいぜ？お前が部活終わる連絡寄越してきた三分くらい前に職員室に帰ってきたから。」

あの人、出歯亀してたのかよ…。あとナチュラルに職員室にいるなよ、普通居心地悪くないか？ああいうところ。

「ま、これから頑張れよ。明日もあるんだろ？はは、楽しみだな。もしかしたら青春ラブコメが始まるかもしれないぜ？」

「ねーよ。」

妙にニヤケながら言ってくる戯言を聞き流しながら、頼んだミラノ風ドリアを口に入れた。

由比ヶ浜結衣は真つ直ぐな少女である。

「やあ、比企谷。勿論部活には行くんだらうな？」

放課後を告げるチャイムの後、教室を出た俺を待つていたのは腕を組みながら壁に寄りかかり、此方をじっと見つめる平塚先生だった。

なんとというか、カツコイイなこの人。

「いや、行くつもりでしたよ。え、もしかしてそれを言う為に待つてたんですか？」

「君が部活に行かずに直接帰る可能性もあったからね。それに、君に用があったから丁度いいだらう？」

そう言うのと寄りかかっていた体を戻し「行くぞ」と短く言うのと先を歩いていく。…やっぱ後ろ姿とか色々含めて、この人男前だよなあ…。

「それにしても、本当に意外だったよ。まさか君から友達になろうなんて言うとはな。」

「…ああ、そう言えば聞いてたんでしたっけ。」

「本当は途中で入っていかうと考えていたのだがね。水を差してしまうと思つたよ。」

まあ、昨日の雪ノ下を見る限り言い争う確率は高かつただろうしな。たまたま俺が親近感を覚えただけだし。

「それで、用つてなんなんですか？」

「ああ、そうだった。聞きたいことがあつてな。…比企谷から見ても、雪ノ下はどう思う？」

「どう…とは？」



「君から見た印象でいい。純粹に思った事を言ってくれればいいんだ。」

俺から見た印象…難しいな。

「…そうっすね。か弱い少女って感じですかね。若しくは箱入り娘って言い方でもいいかもしれません。」

「ほう？あまり雪ノ下にその印象を抱く人間は少ないと思うのだがな。」

確かに雪ノ下は高嶺の花的な怖い印象があるしな。俺も話してなかったら強くて完璧な人間だと思っていたかもしれない。

「…なんというか、昔の俺に似てたんですよ。今まで積み重ねてきたものを間違えていたって思うことが嫌で、必死に否定している事が。」

昔、俺は虐めを受けたことがあった。最初はよくあるもの。ヒキガエルだとか、

比企谷菌と呼ばれるだけ。今じゃくだらないと思うものでも、当時の俺は嫌でしょうがなくて、必死に変えようとした。

俺を嫌う理由がわからなくて、その理由を自分に求めた。もしかしたら勉強が足りなかったのかもしれない、運動能力が低いのもかもしれない、清潔感がないのかも…そんな具合に。

必死に足掻くうちにそれは更にから回った。ヒキガヤの癖に勉強出来るのがキモい、ヒキガヤの癖に運動できるのがキモい、クラスの名前を覚えているのがキモい、こつちを見るのがキモい…。

まあ、つまるところ俺キモいという印象で固められていただけ。特に理由などなかったのだろう。それに気づく頃には、世界の残酷さに目が澱んでしまっていた。腐ったと形容してもいいかもしれない。

「雪ノ下は強いですけど、その強さは裏返せばそれは雪ノ下の弱さで出来てると思うんですよね。自分は正しいのに周りがそれを否定する。雪ノ下は、その正しさを曲げられ

い。」

それが、雪ノ下の「強さ」で、「弱さ」だ。

「俺はそれを正しいとも間違いとも思わないです。清濁併せ呑むとまでは言いませんけど、この世界って正しいだけじゃ生きていけないのは知っているんで。」

…でも、正しさを貫くのも間違いじゃない。それが独りじゃ難しいことは既に知っているんで。」

目が腐った雪ノ下は見たくないしな。

「…ふふ。やっぱり君を奉仕部に入れて良かったと思うよ。」

平塚先生はそう微笑んだ。その微笑みはとても綺麗で、なんでこの人結婚出来ないんだろうなああと切実に思った。

多分、男よりも男前だからなんだろうなあ…。

「うす。」

平塚先生と別れて奉仕部の扉を開く。一応ノックをしてからだ。昨日平塚先生に指摘してたし、そういうところは厳しいのだろうか。因みに二回だと一般的にトイレなどの空室を確認するノックになるらしいので受験生の諸君は注意だ。

「…ああ、本当に来たのね。」

読んでいる本から目を逸らさず雪ノ下はそう言った。

「入部するって言ったろ。」

「そう。なら今度からノックは無しでいいわ。一々反応をするのも手間だから。」

「そうか。」

それなりに緩いらしい。まあ、確かに毎回返事するのも面倒くさいだろうしな。

昨日出した椅子の下に荷物を下ろして自分も座る。一応、席は出したままにしてくれたようだ。

「ああ、そう言えば。平塚先生が依頼を多く解決した方が勝ちのバトル方式にするつてよ。昨日伝え忘れたらしい。」

「…そう、いいわ。あなたには負けないから。」

少し此方を見てそう告げる。…なんかライバルみたいな事言われた。敵対視されてるのか、それともただの負けず嫌いか。別に俺は勝ち負けはあまり気にしてないんだが…。

「…あなたは、あまり私に話しかけて来ないのね。」

「…は？え、話しかけて欲しいの？」

それから十五分くらい経っただろうか。いきなり雪ノ下が話しかけてくる。え、意外と寂しがりだったりするのだろうか。因みにぼっちは結構な頻度で寂しがりだったりする。例のC組の厨二病とかな。アイツたまに千景と一緒にいる時後ろに尻尾が見えるもんな。

「そうじゃなくて。…私に近づく男子は大体下心込みだったから。そういう人間は聞いてもないのによく話しかけてくるのだけれど、あなたはそういう素振りを見せなかったから…もしかして、あなた同性愛者だったりするのかしら。」

「ちげーよ。」

まあ、確かにコイツ程可愛ければ男子は大体下心持つだろうな。なんとなく癪だが。

「…まあ、可愛い妹がいるから、それで慣れてるんじゃないの。あとそもそも期待してないからな。」

小町は愛しの妹という鼻屑目を除いても美少女と言っても過言じゃないだろう。顔立ちはしてるし、それに中学の頃唯一話してた女子もモテるタイプだったから意外と美少女慣れはしてるのだろう。…他人を美少女って認めるの、意外と恥ずかしいな。

「…あなた、シスコン？」

「否定はしない。」

千葉の兄妹はそういうものなのだ。高坂さん然り、千種さん然りな。

そんな話をしていると、コンコンとノックの音がした。

「どうぞ。」

「し、失礼しまーす…。」

控えめなノックの音と、少し緊張しているのか上擦った声の女子が入ってきた。桃色がかかった茶髪をお団子にして、服装は少し崩している。イマドキの少女って感じの見た目だ。…なんか見たことある、というか同じクラスじゃないか？トップカーストの一人だった気がする。

「あれ、なんでヒッキーがここにいんの!？」

「呼ばれてるぞ雪ノ下。」

「どう考えてもあなたでしょう、ヒキコモリ君。」

あ、そのあだ名呼ばれたことあるな。少し懐かしい思いをしてしまった。…い



や、蔑称だな？

「…というか、ヒツキー？」

「ひきがや、でしょ？だからヒツキー！」

あ、名前知られてるんだ。少しときめいてしまった。ちよつろ、俺。

「確か二年F組の由比ヶ浜結衣さんだったわね。」

「あ…あたしの名前知ってるんだ…。」

へえ、すげえな雪ノ下。同じクラスの俺ですら名前は覚えてなかったのに。もしかしたら学年の全生徒と顔と名前は知ってるのかもしれない。

「…まあ、雪ノ下の事だから一学年分の生徒の顔と名前は覚えてるんじゃない？知らんけど。」

「全員は覚えてないわ。あなたの顔は知らなかったもの。」

「嬉しくない特別扱いどうも。」

「あら、もつと感謝してもいいのよ？ 私からの特別扱いなんて、普通の男子生徒なら泣いて喜ぶわ。」

逆にそれで泣いて喜ぶ男子生徒キモくないか？ 実際やったらゴミを見る目で見  
るだろうに…。

「なんというか…面白そうな部活だね！」

「え、今ので？」

俺がただ罵られてるだけじゃなかった？ そういう趣味を持つてるのだろうか。

「それで、依頼内容はなんなのかしら。」

「あ、その…えつと…。」

雪ノ下が話を戻すと由比ヶ浜が俺をちらつと見た。

「…あー、なんか飲み物買ってくるわ。お前らは？」

「私は紅茶でいいわ。」

躊躇なく頼めるのはお前らしいよなあ…。

「由比ヶ浜は？」

「えっ？あ…じゃあレモンティーで…。」

「了解。」

「あ」

「あれ、ハチ。部活中じゃねえの？」

「なんか最近学校でよく会うなあコイツ……。飲み物を買いに自販機に行ったら千景に会った。」

「まあ、パシリだよ。つかお前今日バイトなかったか？」

「バイトは一昨日先輩の代わりに出たから今日代わってもらったの。：なんつーか、楽しそうでよかったわ。昨日あんな事言っただけどさ、結構心配してたんだぜ？」

普段あまり見せない真剣な表情でそう言ってくる千景。：なんか過保護じゃないか？母親か？なんならうちの母さんよりも過保護まである。

「奉仕部だっけ？頑張れよ、なんかあつたら手伝うからさ。」

そう言っただけの教室の方へ戻って行く。：放課後に教室で何やってんだろかな…。うちのクラスのトップカースト勢にも言えるけど。

まあ、なんだかんだ言っただけの俺の友達に優しいやつなのである。俺が女だったら惚れてるんだろうなあ…。いや、今のイメージが強過ぎてやっぱ無理だね。想像したくない。

「…で、なんで家庭科室？」

「手作りクッキーを食べて欲しい人がいるそうよ。でも自信が無いから手伝って欲しいんですって。」

場所は変わって家庭科室。部室に帰ったら誰も居なかったので隠れんぼの時のトラウマが蘇った。雪ノ下の書置きがなかったら泣いていたとこだった。

…にしても、手作りクッキーねえ…。リア充してんなあ…。

「お前、いつも喋ってるやつがいるだろ。そいつらに頼まねえの?」

「その…あんま知られたくない雰囲気っていうか…このマジっぽい雰囲気と合わないっていうか…。」

そうぼしよりと呟く。まあ、あのメンバー自体料理出来なさそうな奴の集まりだしなあ…。

「平塚先生の話だと、この部活って生徒のお願い聞いてくれるんだよね?」

「いいえ、それは違うわ。奉仕部はあくまで手伝うだけ。飢えた人に魚を与えるのではなく、魚の取り方を教えて自立を促すの。」

「ほえー…なんかすごいね！」

絶対わかってないぞこいつ。もしかしてアホの子なのだろうか。

「…で、手作りクッキーだよな？そういうのが得意な知り合いを知ってるから、呼んでいいか？」

さつき手伝うという言葉もとってるからな。ここは使わせてもらうことにしよう。

残念ながら俺はお菓子は作れないし、味見だけになってしまいそうだからな。

「まさか、もう呼ばれるとは思ってなかったわ…。」

と、いうわけで千景を呼びましたと。あとさつきから雪ノ下と由比ヶ浜の目  
がすごい。如何にも「あんな知り合いいたんだ」とか「ああ、虐められてるのね」みた  
いな顔をしている。

「あ、自己紹介な。ハチの友達で茅ヶ崎千景です。雪ノ下さんと…あと、隼人とか翔の  
友達の子だよな？よろしくな。」

「隼人君と戸部っち知ってるんだー！あ、あたし由比ヶ浜結衣！えっと…ちがちー、よろ  
しくー」

「ちがちー？初めてだわその呼ばれ方。じゃガハマちゃんな。」

うわ、すげえ、もう仲良くなった。というか…ちがちー…ヒツキーの時も思った  
が名付けのセンス独特過ぎないか…？



「…えっと、茅ヶ崎君…あなた本当にクッキーを作れるのかしら。失礼だけれどそういうのを作る風には見えなくて。」

「あー、チャラいってよく言われるもんな俺。大丈夫だよ、ハチのお墨付きだから。なんだったら先に作ろうか？」

因みに千景がお菓子作れるのは、小遣いが貰えない千景がバレンタインのお返しをどうするか悩んだ結果、安価で大量生産出来る手作りになった…という理由である。

こいつ、モテる癖に律儀に全部返すからその評判が回って更に貰う量と返す量が増えたらしい。

取り敢えずお墨付きって事を示すため領いておいた。4年間の努力が垣間見える美味しさである。

「…比企谷君も領いてるみたいだし、どうやら本当のようね…。そう、なら先に茅ヶ崎君に作ってもらって後から私と一緒に作りましょうか。それでいいかしら、由比ヶ浜さ

ん。」

「うん、ありがと！雪ノ下さん、ちがちー！」

「んじや軽く説明しながら作ろうか。」

「…で、なにこれ。ホームセンターの炭？」

「違うもん！ヒツキーのバカ！」

「どうしてあれだけミスを重ねられるのかしら…。」

「独創性の塊だなあ…初心者にありがちな。」

手本として作った千景のクッキーは…まあシンプルに美味かった。由比ヶ浜と一緒に作っていた雪ノ下の手際も充分によかった。

…それを上回って由比ヶ浜の料理の腕は酷かった。桃缶を入れようとするな、しかも直で。

「ま、まあ味はいいかもしれないじゃん!?」

「本当にそう思ってるの?」

「噛めないカカオ100パーセントチョコみたいな味だと思うけどなあ…。」

まあ、食うけどな。一応俺は味見しかできないし。というか千景はさつきからフォローしてるのかしてないのかわからないな?」

…にっが。

「さて、どうすれば良くなるか考えましようか。」

一応その後には全員で食べてみた結果、由比ヶ浜は半泣きでレモンティーを飲んでるし、雪ノ下ですら食べた瞬間に紅茶で流し込んだ。千景もなんか微妙な顔をしている。

「由比ヶ浜がもう料理をしないこと。」

「ヒッキーひどい！」

酷いのはお前の料理の腕である。

「それは最終手段よ。」

「解決しちゃうの!?!」

がびーんと驚いた後、ため息を吐いて愚痴をこぼす。

「…やっぱあたし料理向いてないのかなあ…。才能？っていうの、そういうのなし。」

「…努力あるのみよ。」

「え？」

「由比ヶ浜さん、あなた今才能がないって言ったわね。まずその認識から改めなさい。最低限の努力をしない人は才能を羨む資格もないわ。成功できない人間は成功者の努力を想像できないから成功しないのよ。」

…やはり、雪ノ下は正しすぎる。その正しさは眩しいもので…普通の人間には眩しすぎて毒である場合もあるのだ。

「でも、そういうのみんなやらないって言うし。こういうの合っていないんだよ…。」

そして恐らく、由比ヶ浜にもきつと。

「その周囲に合わせようとするの辞めてくれるかしら。酷く不愉快だわ。」

痛すぎる毒であると思うのだ。

——そして、俯いた由比ヶ浜は声を絞り出す様に声を出した。

「か…かつこいいい！」

「は？」

「ふはっ、ははは！雪ノ下さんもガハマちゃんもやべーな！」

驚いた様に声を上げる雪ノ下と、本当に面白そうに笑いだした千景。そして俺は…声すら出なかった。彼女の真っ直ぐさに、真っ直ぐついていける人間がいるとは思わなかったから。

「建前とかそういうの全然言わないんだ。なんかそういうの、かつこいいい！」

「は、話聞いてた？結構キツイこと言っていたつもりだけれど。」

「うん、確かに言葉は酷かったし、正直引いた。：でも、本音で感じがするの。」

あたし、今まで他の人に合わせてばかりだったから。ごめん、次はちゃんとやる！」

今まで、こんなリアクションをされた事がなかったのだろう。雪ノ下は固まって動けなかった。俺は雪ノ下の肩をポンと叩き声をかける。

「教えてやれよ、正しいクッキーの焼き方。」

そんな俺と雪ノ下を優しい表情で見つめる千景を見つけて、なんだか無性に恥ずかしくなった。

そして出来た次のクッキー。先程よりかはクッキーらしくなったモノが出来上がった。

「全然ちがーう…。」

「どうすればわかってもらえるのかしら…。」

ぐつたりと机に伏せる雪ノ下。

「ごめん雪ノ下さん、もう一回だけ付き合って！」

握りこぶしを二つ作ってやる気を見せる由比ヶ浜。何かを思いついたのか自分のノートに何かを書き込んでる千景。

「…なあ、なんで美味しいもんを作ろうって思ってるんだ？」

「え、どういうこと？」

「そうだな、十五分くらい時間をくれ。俺が本当のクッキーつてのを教えてやるよ。」



今回、何も出来てないからな。ここから先は俺のターンだろう。

「…茅ヶ崎君、比企谷君はクッキーを作れるのかしら？」

「んー？俺は聞いた事ないかな。ハチの料理レベルは小学校六年レベルだったはず。」

「で、これがあなたの言う本当のクッキー？」

「なんか、あんまり美味しくなさそう？」

「まあまあ、取り敢えず一枚食ってみてくれよ。」

因みに千景は俺の真意に気づいているだろう。さつきからにやけているし。ムカつくから脇腹を突いた。

「これは…」

「…あんまり美味しくない。」

ポソリと由比ヶ浜が呟く。それはそうだろう。

「…そつか、美味しくなかったか。悪い、じゃあ捨てるな？」

ここで凄く申し訳なさそうに言う。相手に罪悪感を与えるように。

「え!? べ、別に捨てなくても！ 食べてたら美味しいかも！」

由比ヶ浜が慌てて否定してくる。

「まあ、これはさつき由比ヶ浜が作ったやつなんだけどな。」

そう、俺は今の十五分間にクッキーは作ってない。時間を見計らって三人を呼んだだけなのだ。

「まあ、何が言いたいかって言うところ結局こういうのって心が大事なんだよ。由比ヶ浜、ぶつちやけで聞くけど、渡す相手って男子だろう？」

「え？その…うん。」

「なら、せっかくの手作りクッキーって事をアピールした方がいいだろ。なんならちよつと悪い方がいいまである。由比ヶ浜みたいな女子が頑張って作ってくれたクッキーなんだ、単純な男子の心は揺れまくるだろうよ。」

「…ヒツキーもゆれる？」

「ああ、揺れる揺れる。」

俺の適当な返事に由比ヶ浜は「そっか」と小さく呟いて顔を俯かせた。

「…依頼はどうするの？」

「…うん、雪ノ下さん今日はありがとね。一回家で頑張ってみる。」

「…そう、少し心配だけれど…頑張って。」

「ありがとう！——ゆきのん！」

由比ヶ浜が雪ノ下に抱きつく。えっ、これがキマシタワーってやつ？

家庭科室の片付けが終わると部活終了時刻五分前と迫っていた。雪ノ下と由比ヶ浜は今日だけでかなり仲良くなったみたいだ。…そのことが、何故かたまらなく嬉しかった。

「あ、ガハマちゃん。これ今日見てた感じダメだったとこ書いといたから参考にあげる。…特に最後大事なこと書いたからちゃんと見て欲しいな。」

「え、ありがとちがちー！…あ、うん。頑張るね。」

「ん、頑張れ。」

何かを書いてたと思つたらそんな事だったのか。…なんとなくこういう所がモテるんだろくなあつて思いました、まる。…由比ヶ浜が紙を見た時少し表情が曇つた気がするけど気の所為だろうか？

「ガハマちゃんと雪ノ下さん、二人ともいい子だったな。」

「なんだよ、それ。」

一緒に帰るの、結構久々な気がするなあ…高一の最初の方？ハチ、あんま学校で

見かけないから。俺もバイトあるから中々時間が合わないってのもあるんだろうけど。

「…良かったじゃん。」

「なにが。」

「雪ノ下さんとガハマちゃんの話。」

なんとなく、ハチは雪ノ下さんに過去の自分を重ねているのがわかった。出会った頃、何処か消えてしまいうんじやないかっていう目をしてたあの頃のハチに。

今のハチも目は腐ってるけど、あの頃はもつと酷かった。そんなハチが普通に笑えて、普通に他人を気遣える今がたまらなく嬉しい。

そう言えば、雪ノ下さんとガハマちゃんとハチの組み合わせ。何処かで既視感を感じる三人だったけど、最後の方で気づけてよかった。

去年の交通事故の関係者の三人が集まっていたのは、なんて運命のイタズラだろうか。

…多分、ガハマちゃんのクッキー渡したい相手はハチだろう。それに気づいたから、アドバイスと一緒にメッセージを書いた。

『犬の飼い主さんへ、ハチに渡す時は誤魔化さずなんで渡すか言うように!!』

きつと、ハチは自分から気付いたら拒絶するだろう。優しいだけの女の子だと勘違いして。だから、自分から行かないといけない面倒臭い奴なのだ。

「頑張れよー、ハチも。ガハマちゃんも雪ノ下さんも。」

「ヒツキー！あの時、サブレを助けてくれてありがとうございます！ございました！」

翌日、放課後由比ヶ浜に呼び出され頭を下げられた。

え、何？サブレ？お菓子？

「あ、サブレって言うのはうちで買ってる犬の事で…その、入学式の日…」

入学式…ああ、なるほど。入学式の日には俺は犬を庇って事故に遭っている。その飼い主が由比ヶ浜だったのだろう。

「…確かもうお礼は貰った気がするが。」

気づいたら無くなっていたが確かお高めのお菓子を貰っていた気がする。

「…その、あたし個人から渡したくて…だからその。クツキー、良かったら受け取ってください！」



ふと、トラウマが蘇った。小学校の頃、唯一仲良くしてくれた女子がいてそれが俺の初恋だった。虐められていた俺にも優しくしてくれただから。そんな中間いてしまったんだ。

『ヒキガヤ、…うん、気持ち悪いよね』

本当にそう思っていたのかは知らない。周りに流されたのかもしれない。…それでもその時に気づいてしまった。俺に優しい女の子は、きつと周りにも優しいのだ。

そして、由比ヶ浜は優しい女の子だ。

「——まあ、そのなんだ。有難く貰つとく。」

中学の頃、俺は千景を遠ざけようとした事がある。俺といる世界が違うんだと勝手に判断して、会わないようにした。

その時に言われた言葉を今なんとなく思い出した。

『俺の気持ちを手勝手に決めつけんなバカ!』

由比ヶ浜は、俺を真っ直ぐに見つめていた。

「…まあ、また奉仕部に来いよ。雪ノ下とも会えるだろ。」

…もう一度くらいは、優しくして真っ直ぐな女の子を信じてみてもいいかもしれないな

い。